

## 地域資源を活用した

## 黒毛和種肥育素牛の効率的生産技術

子牛市場では体重が大きく、外観のよい子牛が高値で取引されることから、育成期に濃厚飼料を多給し、過肥の状態の上場される子牛が多くみられます。しかし、過肥の子牛は、肥育農家に導入されてからおよそ2か月間の飼育直ししてから肥育することが多く、大きな経済的損失になります。そこで、栃木県畜産酪農研究センターでは、農研機構畜産草地研究所や他県の公立研究機関との共同研究を行い、飼料用米等の地域資源を活用して、育成から肥育までの効率的な飼養管理技術を開発しましたので紹介します。

## ☆ 技術の概要

1. 6か月齢の黒毛和種去勢牛を供試して10か月齢まで育成しました。濃厚飼料は飼料用米を混合した配合飼料を用い、粗飼料はイタリアンライグラスサイレージを主体にしました。粗飼料から供給されるTDN割合が30%の慣行区に対して、粗飼料多給区は粗飼料から供給されるTDN割合を40%に設定しました。
2. 育成期の飼料摂取量や育成終了時の体重及び日増体量は両区に有意な差はありませんが、粗飼料多給区は胸囲が有意に大きく、胃の容積が発達していることが示唆されました。
3. 育成後の牛を11か月齢から肥育し、同時に、市場から導入した子牛を飼育しせずに肥育しました。全頭に同一飼料を使い、11～13か月齢は飼料用米20%を含む濃厚飼料と稲発酵粗飼料を分離給与し、14か月齢からは、飼料用米30%を含む濃厚飼料と稲わらの無加水TMRを給与して、28か月齢で屠畜しました。
4. 肥育終了時の体重や枝肉重量には有意な差がありませんが、粗飼料を多給して育成した牛はロース心面積が大きく、BMS No.が改善される傾向がありました。一方、市場から導入した牛は、歩留り基準値や肉質等級が低く、粗収入が2割程度の減益となりました。



写真1 肥育試験(左)と粗飼料を多給した育成牛(右)

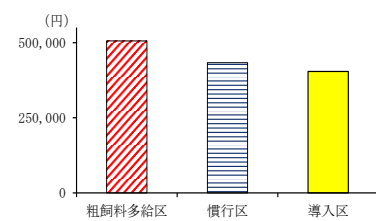


図1 肥育期の粗収入

## ☆ 活用面での留意点

肥育期における飼育直しを必要としないため肥育の効率化が図れます。詳しくは、栃木県畜産酪農研究センター肉牛飼養研究室 櫻井由美 (028-677-0303) に問い合わせ下さい。

(日本政策金融公庫農林水産事業本部 テクニカルアドバイザー 加茂幹男)